

岐阜支部

ちようちん

2013年5月号

全国障害者問題研究会岐阜支部 〒500-8879 岐阜県岐阜市徹明通7-13 岐阜県教育会館401

☎/Fax 058-253-7033 Email zenshouken_gifu@yahoo.co.jp

ユニークな連載の開始です。岐阜支部の副支部長・小森淳子さんが、ヘルパーさんと一緒に作ったおいしい料理のレシピを紹介していきます。本当は4月号の原稿としていただいていたのですが、事務局のミスで小森さんには失礼なことをしてしまいました。申し訳ありません。紙幅の都合で毎号の掲載になるかどうかはわかりませんが、小森家の台所から皆さんの食欲と創作意欲をかきたてるおいしいにおいを皆さんにお届けいたします。ご期待ください。

ヘルパーさんと作る

カンタン料理レシピ ① こもり じゅんこ

私は、週3回ホームヘルパーさんに来てもらい、毎回30分程度台所仕事をやってもらっています。①美味しいかどうか（うちの場合、ビールに合うかどうか） ②栄養のバランス（私以外みんなアトピーなので、今でも米+魚+野菜中心のメニュー） ③体力をなるべく使わないように作る（握力7の私には食事作りはスポーツに近い） ④なるべく時間をかけない（原稿書きと調べ物の時間を確保するため）の4点に照らして、ヘルパーさんにやってもらう部分を決め、自分がやりやすいように料理をアレンジしていきます。

今回は、**なんちゃってコロッケ**

やわらかいコロッケのたねをまるめて、小麦粉→卵→パン粉と衣をつけていくのは、アトピー型脳性まひには大変むずかしい作業です。というより、不可能に近い。私も、十数年前、おいそうな新じゃがをいただいて、今夜は手作りコロッケにしようと張り切って挑戦したのですが、まるめるところまではできたものの、衣をつけようとすると、どんどんくずれていって上手くできません。どうしたものかと考えているところに、保育園から帰宅した5歳の娘。「やってみてくれない？」と、やり方を教えて頼んだら、なんと、ちっちゃな手で次々ときれいに衣をつけ、フライパンに並べてくれました。感激して彼女にお礼を言い、障がいのない手の素晴らしさに感嘆したことをよく憶えています。

あれ以来、手作りコロッケはあきらめていましたが、最近、友人の話を参考に作ってみたのが、《なんちゃってコロッケ》です。

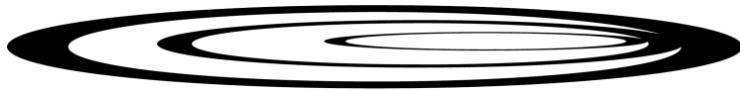
ヘルパーさんにやってもらうこと

- ①じゃがいも4～5こ皮をむき、適当な大きさに切る。
- ②玉ねぎ1こを粗めのみじん切りにする。

作り方

- ③鍋で①をゆでてつぶし、塩コショウで味をつける。もしくは、ゆでる時コンソメの素を入れ味をつけておく。
 - ④②を油でじっくりいため、牛か豚か合挽きのミンチお好みの量を入れ、いっしょにいためて、塩コショウで味をつける。
 - ⑤③と④を混ぜ、コロッケのたねを作る。
 - ⑥フライパンに少し多めの油をひき、大さじ4～5杯のパン粉を焦がさないようにキツネ色になるまで炒める。
 - ⑦⑥の3分の1の量を大量に敷いて、⑤のをせて丸く形を整え、残りのパン粉を表面にまぶし、大型コロッケのようにする。
- 大きなスプーンで取り皿に取って、食べる。

発見！“発達保障”～from Fresh Eyes～



☆ 2. タテへの発達とヨコへの発達 ☆

若井 基一

みなさんは、子どもの発達、人間の発達という言葉にどのようなイメージをもたれているでしょうか。

「首がすわった」「歩行ができるようになった」など姿勢－運動系の変化、『『マンマ』という初語を獲得した』『2語文が出現した』など言語の表出にかかわる変化、あるいは「今まで、おもちゃを独り占めして遊ぶことで満足をえていたのが、友だちと一緒に遊びを楽しめるようになった」など対人関係面での変化等々。

私たちが「発達」を語るとき、上の例のような今までに見られなかった行動的变化、すなわち「能力の高次化」を指すことが多いと言えます。

しかし、全障研が設立される以前、すでに田中昌人さん（後の全障研初代委員長）をはじめとする近江学園の研究部では、新たな能力を獲得していく過程を「タテへの発達」とするなら、もう一つの発達の方向があること、すなわち「ヨコへの発達」という視点を提起していました（河合）。

では、「ヨコへの発達」とはどのようなものでしょうか。

乳児期後半から幼児期にかけて出現する発達の变化の重要な指標である「指さし」で説明してみましょう。子どもは、最初もっぱら自分から他者の注意をひきつけるために指さしをします（「要求の指さし」）が、そのうち『『～はどこ？』のように他者から問われた事柄にたいして、指さしで答える』（可逆の指さし）ことができるようになります。これは指さしにおける「タテへの発達」です。

では、指さしにおける「ヨコへの発達」とはなんのでしょうか。それは、たとえば「今まではお母さんに対してだけ指さしで伝えていたのが、お父さんにもするようになった」、「家でしかできなかったのが、保育園でも指さしをする姿が見られるようになった」など、指さしに関わる経験の拡がりのこと、いわば、今もっている「能力を発揮できる幅が広がる」（丸山）ことだと言えます。

障害をもつ人たちは「タテへの発達に困難を示しやすい存在、すなわち同じ発達の段階に長くとどまっている存在とみなされる。（中略）しかし、その時点で獲得さ

れている能力の適用しうる範囲を拡大させていく（人やものとの関係をゆたかにしていく）という方向への変化をヨコの発達と見るならば、どんなに重い障害をもっている人も、発達しつつある存在として理解しうる」（土岐）のです。

「ヨコへの発達」は、発達検査の結果にはほとんど反映されないでしょう。しかし、「タテへの発達」と異なり、同じ「ヨコへの発達」のしかたをする人は一人としていません。それぞれに固有な、個性的な発達なのです。こうして「ヨコへの発達」の概念を取り入れることにより、障害の有無に関わらず、また重ねた歳月の多少に関わらず、人間とは無限に発達し、より自由を求める存在であるという人間観、発達観を手に入れることができるといえるでしょう。

高谷清さんは、「ヨコへの拡がり（発達）」について、次のように述べています。「この拡がりには、自分がそのまま受け入れられ、自分が存在し生きているのがうれしい、楽しいと感じる世界があり、生きているよろこび（自己肯定感）に浸ることもできる時空である。それは他の人をそのまま受け入れる関係にもなる。」

ポップコーンに通う30代前半の千秋さんは、長らく乳児期後半期の発達レベルにいます。自我が芽生えた状態で長い年月を生きてきた千秋さんは、好きな人、受けられる人を選択するため、指導員を手こずらせます。新人職員の介助は受けつけようとしません。以前の千秋さんだったら、この状態は長く続いたことでしょう。しかし、今年の千秋さんは、ぎこちない介助しかできない新人職員の働きかけを予想以上の早さで受け容れています。おそらく、これまでの指導員とのかかわりで得た「生きているよろこび」を見知らぬ人とも共有する力が、千秋さんの内面に育ってきているからなのでしょう。千秋さんのこのような姿を見るとき、私たちは千秋さんの「ヨコへの発達」「無限の発達」を確信するのです。

参考文献

- 河合隆平(2012)『発達保障ってなに?』第2章 pp.31-32 全障研出版部
高谷清(2008)『こどもの心・おとなの眼』pp.71-74 クリエイツかもがわ
丸山啓史(2012)『発達保障ってなに?』第1章 pp.2-10 全障研出版部
土岐邦彦(2010)『特別支援教育大事典』p.747 旬報社

リレーエッセイ「私と全障研」②

4月号からリニューアルされた「ちょうちん」の紙面には、リレーエッセイ「私と全障研」の連載が始まりました

た。毎号お一人ずつ、自分が全障研とかかわることになったきっかけ、全障研で学んだこと、さらには全障研への注文など、なんでも好きなことを自由に書いてもらおうというスペースにしました。このリレーエッセイが会員同士の交流につながり、来るべき全国大会に向け地域を越えた大きな輪となることを願っています。

～ともに生きるということ～

浅井彰子（アナウンサー・発達相談員・大学非常勤講師）

生まれ育った飛騨古川で、幼い頃にふれあった三人の障害のある女性のことを、まず。

一人は近所の幼なじみ。生まれつきの重度の身体障害をもっていたが、たいへん利発で、私の母は彼女の頭の良さを常々ほめていた。同じ町内の女の子たちどうしでよく遊び、彼女は歩行器を使って外遊びにも元気に参加していた。しかし、皆が小学校に通い始める頃、彼女はいつのまにか姿を消した（幼心にはそのように思えた）。家を離れて施設で暮らし始めたと言われ、以降は長いお休みにしか会えなくなった。

二人めは、やはり近所の家の女の人の。顔に少しの奇形があり、知的障害もあったようだ。大人たちの話から、どこか遠い所で暮らしているらしいと想像していた。その人はときどき実家に帰ってきたが、小さな私たちがかたまって遊んでいる様子をいつも離れた場所から見つめ、「かわいいなあ」とひとりごとのようによくくり返していた。

三人めの女性は、同級生の姉。小児まひで体に重い障害があり、学校には行かず、毎日自宅の居間で横になっていた。友人宅に遊びに行くと、お姉さんはとても喜んでくれ、たわいもないおしゃべりをしたり、いっしょにテレビを見たりした。外に出たことがほとんどないらしく、真っ白な肌が印象的だった。

岐阜で暮らし始めた1992年、近くの養護学校にボランティアに行く地域交流サークルに出会った。これがやりたかったんだ！とおこがましくも思った私はすぐに入り、10年あまり毎週のように養護学校を訪れた。そんな中で、ボランティアとしてだけではなく、専門的な知識を持った者としてもかかわりたいとの願いが生まれた。

1999年、43の歳で岐阜大学に3年次編入学をし、地域科学部の土岐先生のゼミ生に。学部の2年と大学院修士課程の2年の計4年間を土岐研究室でお世話になった。いつだったか、土岐先生が「養護学校の子どもたちは純粋で素直だと言う人がよくいるけれど、その表現にこそ、実は偏見が潜んでいるんだ」とおっしゃったことがあった。そのあとに続く先生の言葉から、一人ひとりを尊厳をもってとらえることのできる目をもつことの大切さを学んだ。以来、この教えは、私自身の障害観の土台となっている。

土岐先生には全障研とも出会わせていただいた。ポップコーンに仲間入りをするきっかけも与えられた。と、このように書いてくると、土岐先生に感謝しなければいけないあとの思いが頭をもたげるが、こちらがお世話をしたこともたくさんあるので、ま、フィフティフィフティでいいのではないかと…（笑）

昨年、飛騨市で発達障害に関する連続講座を担当させていただいた。その折、通達が出ているからと、「障害」の表記は「障がい」に統一された。そのことをポップコーンで話題にしたとき、今村施設長はあっけらかんと言った。「そんな細かいこと、どうでもいい。」

素敵な人たちと巡りあいながらの障害者運動。「ふつう」の生活を送れなかった故郷の三人の女性たちが示してくれたことは、今でも反芻し続けている。